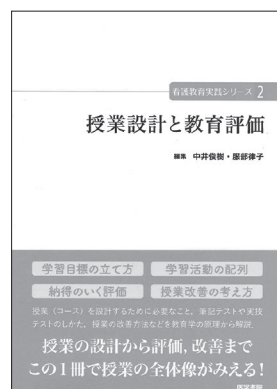


『看護教育実践シリーズ2 授業設計と教育評価』

「授業のいろは」としての
道しるべとなり得る書

シリーズ編集：中井俊樹，編集：中井俊樹，服部律子／定価：本体 2,400 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



看護学教育にかかわる教員にとって、活き活きと学生が学び、学習効果が実感できる授業設計や、適切な教育評価は、教育の醍醐味でもあり、命題ともいえます。「わくわく感が学習エンジンとなる授業」「ライブのような活き活き感を学生と共有できる授業」をめざしている教員は、私だけではないと思います。

今まで看護学教育課程、教育方法、教育評価などについて学んだ知識は、私の脳裏に点在していました。そんななか、本書を読んでみると、知識や理論が整理され、まさに今、教員として、科目の教育実践のスタートラインに立った感覚で「統合」されていく実感がありました。「読みながらくわく感が生まれる」と同時に教員として、「腑に落ちる感覚」を体感しながら、教育実践のプロセスを思い描きました。

たとえば、「授業設計における逆向き設計」として「到達すべき目標は何か」「評価(どのように到達を確認するのか)」「方法(どのように到達するのか)」のていねいな教育的な問いが明示されています。目標-方法-評価ではなく、到達の確認があってこそ、方法論が決まるのです。また、「最も重要なのは人を育てることです」の一文には、評価におけるいちばん大切な、原点となる考え方が明示されています。以前、梶田叔一先生に教育評価を学んだときの、氷山の一角しか見えないなかで

評価する怖さ、大切さ、評価のための評価にならない考え方を再確認することができました。そして、教育学の知識と理論に支えられた Keyword が教員の思考過程に自然に溶け込んで、結合され、「わくわく感」や「腑に落ちる感覚」につながると思えました。

この本を読んで想起した場所があります。日光市にある「いろは坂」です。この本は、看護学教育の教員が、教授活動を新たに始めるとき、自分なりの取り組みを見つめ直すとき、そして、授業の進め方や評価に困惑するとき、多様な状況にある教員への看護教育実践における「授業のいろは」としての道しるべとなり得ます。「いろは坂」は、「いろは」に留まらず、「～あさきゆめみし 糸ひもせず(ん)」まで、上りの道と下りの道で、それぞれの景観を変えながら、坂道を上り下りしていきます。一面に教育学、もう一面に看護学をしっかりと見すえながら、学問のスキルミックスによるていねいな説明が、読者をより充実した教授活動へと誘うでしょう。

「学び合う」という言葉は大好きな言葉の1つです。教員が授業設計を行い、科目運営を進めながら、その過程を楽しみ、学生と学び合えるように、確かな知識と理論を勇気に変えて、授業方法の工夫や発展的な活用につながる一冊との出会いに感謝しています。